

ホスピタリティの原点を求めて

岡本 伸之

設置の経緯

本学は1998年、埼玉県新座市の武蔵野新座キャンパスに2つの新しい学部を誕生させた。観光学部とコミュニティ福祉学部である。これらの学部を設置するに当たっては、本学の建学の精神に合う理念を共有することが課題とされた。設置準備に当たった関係者の間で種々議論を重ねた結果、「ホスピタリティ」と「コミュニティ」という2つのキーワードによって表現できるような理念を共有することになった。

本学の建学の精神は、創設者ウィリアムズ主教によるとされる「道を伝えて己れを伝えず」という言葉に象徴されるが、観光も福祉も奉仕の精神を基礎とするだけに、また、ホスピタリティについては、新約聖書の『ローマの信徒への手紙』に「旅人をもてなすよう努めなさい (practice hospitality)」とあるように、キリスト教大学としての建学の精神に合うといえる。

しかし、共有する理念を掲げてはみたものの、その内容については、誰が語っても完全に一致するというわけではなかった。また、これはその内容に

ついて合意形成を急ぐような問題ではなく、学部設置後継続的に考察の対象とすべき事柄であるように思われた。そこで、両学部設置の前年に学部横断的な全学共通カリキュラムが設置されたことでもあり、総合Bの制度を活用して、全学部の学生を対象に、ホスピタリティとコミュニティの概念、理念、方法などを扱う科目を設置することにした。

1998年の両学部設置と同時に、ホスピタリティについては観光学部長である私がコーディネーターとなって「ホスピタリティの原点を求めて」(前期, 2単位)、コミュニティについてはコミュニティ福祉学部長である関正勝教授がコーディネーターとなって「地域への視座」(後期, 2単位)をそれぞれ開設した。また、私は「地域への視座」、関教授は「ホスピタリティの原点を求めて」を講師として部分的に担当することにした。

総合Bを含む全カリは全学部の学生を対象としており、武蔵野新座キャンパスの学生を念頭に置いた科目を設置することは全カリの趣旨に反するといえるが、ホスピタリティとコミュニテ

ィは、全学部 of 学生が共有すべき観点であり、学部横断的な科目に相応しいテーマであると思われた。池袋キャンパス of 学部の学生も数は少ないものの毎年履修している。

関連して、武蔵野新座キャンパス of 両学部 of 学生は、卒業生が誕生する2002年3月まで、池袋キャンパスで展開されている科目を履修はできるものの取得した単位を卒業に必要な単位に組み込むことができない。この点について両学部 of 学生諸君の間には不満がある。そうなった理由は、両学部を設置申請するに当たって、武蔵野新座キャンパス完結型、すなわち、両学部 of 学生は池袋キャンパスに出かけなくとも卒業に必要な単位を取得できるようにしたからである。

卒業に必要な単位を池袋キャンパスでも部分的に取得できるようにすることもできた。しかし、その場合池袋キャンパスで開設予定 of 全科目について教員審査を含む設置申請を行う必要がある、膨大な事務量を伴うことからそれは困難と考えざるを得なかった。学部を設置して4年経過すると、その後は学部が自主的に判断することが認められるから、2002年度以降、両学部 of 学生は取得した単位を卒業に必要な単位に組み込むことができるようになる。

ホスピタリティとは

ホスピタリティとは、端的にいえば、他者に対する思いやりのことである。観光学部が研究対象とする社会現象と

して of 観光は、人々が観光者となって一時的に居住地を離れることによって生起する。目的地は観光者を観光客として受け入れるわけであるが、その目的地にとって観光客は見知らぬ旅人であり、よそ者、他者である。その地域にとっては他者である観光客に対してホスピタリティを欠いたのでは地域の境を越えた多文化の交流を期待することはできない。

ホスピタリティ (hospitality) の語源はラテン語 of ホスピタリタス (hospitalitas) を経て同じラテン語 of ホスぺス (hospes) にさかのぼることができるが、ホスぺスは客人と主人 of 双方の意味をもった。主人も別の機会に旅人となれば旅先では客人となるわけで、そのため両義性をもったのであろう。また、敵を意味するラテン語 of ホスティス (hostis) もホスぺスと関連するとされるが、客は敵にもなりうるわけで、旅人をもてなす動機として客として取り込む意味があったのではないかと考えると興味深い。

一方、地域の内部においても、ホスピタリティを欠いたのではコミュニティ (共同体) は成立しない。社会福祉は、従来、ややもすれば恵まれない人々への慈善的な援助というイメージを伴ったが、コミュニティ福祉学部が標榜するコミュニティは、そこに存在する一人一人がかけがえのない存在であるとされるような文化をもつ社会のことである。あらゆる人々の人間としての尊厳が保証されるような社会であるた

めには、他者に対するホスピタリティが欠かせない。

わが国はホスピタリティに欠ける国である。それが証拠に、国境を越える国際観光の現状は、出国する日本人旅行者が年間約1700万人であるのに対して、日本に入国する外国人旅行者の数は約450万人と、日本人海外旅行者の約4分の1に過ぎない。この450万人という数字は絶対数で世界30位以下、人口に対する割合では異常に少ない数といえる。フランスでは毎年人口を上回る数の外国人旅行者を受け入れている。これは、世界には日本にきたことのある人がほとんどいない、つまり日本のことを知っている人がほとんどいないことを意味する。大げさにいえば、国の安全保障に関わる問題である。

日本が外国人旅行者に対するホスピタリティに欠けることは、交通機関の案内板1つ見ても議論の余地が無い。日本人に対しても不親切である。そこで、このままでいいのかと問題になるが、旅人が訪ねてくれないような地域とそこに住む人々は発展ないし成長する可能性がないといえる。なぜなら、人々も地域も、自分のことがわかるためには他者を必要とする。他者を理解することによってはじめて他者と自分との違いがわかり、それが自分を理解することにつながる。そうすることによって自分や地域の強みや弱みがわかり、自分や地域を改善する契機とすることができる。

講義内容

「ホスピタリティの原点を求めて」では、半期の講義の最初と最後に概念、理念、方法の一般論を置き、中間はホスピタリティが中核的な機能であるような各種の分野から斯界の権威を招いて、ホスピタリティの実践をめぐって講義を受ける構成としている。

初年度の1998年度は、西洋史の木村尚三郎東大名誉教授による「現代に求められるホスピタリティ」と題する講義から始まった。木村教授は、わが国でも「ホスピタリティ」という言葉を聞く機会が多くなった、“手厚いもてなし”と訳されることが多いが、語感が違う、日本語にならないなどと指摘した後、ホスピタリティの原点は見知らぬ旅人に無償で食事とベッドを提供することであり、それは中世の修道院から始まったとした。いわばよ者に対する思いやりのことであり、わが国でホスピタリティに溢れた接遇として話題になることが多い旅館の女将による上げ膳据え膳のもてなしなどは単なるビジネスに過ぎず、ホスピタリティとは無縁であるなどの主張を展開された。非常に感銘深い講義で、終わりに学生からごく自然に拍手が起こったほどであった。

木村教授や観光学部の前田教授によるホスピタリティの語源や概念をめぐる講義に続いて、ホスピタリティの実践の現場から講師を招いて講義を受けたが、初年度にお願いした聖路加国際

病院の日野原重明理事長の講義からは、長年にわたる医療に対する献身的な取り組みの姿勢が伝わって、学生に強い感銘を与えた。医療の現場からは、その後千葉県鴨川市の医療法人鉄蕉会亀田総合病院の亀田信介院長に講義をお願いしている。同病院は、カルテ（診療記録）の電子化などIT（情報技術）を活用した最先端の医療サービスを提供する中で、病棟看護婦向けに無線LANカードを付けた230台ものノートパソコンを持たせて看護記録の作成を合理化し、そうすることによって患者との接触時間をできるだけ増やすといったホスピタリティ重視の病院経営を行っている。

観光学部の学生とコミュニティ福祉学部の双方の学生が同時に関心を寄せる講義としては、トラベルデザイナーのおそどまさこ氏による講義がある。彼女は、長年にわたって障害者の海外旅行や国内旅行を企画し実施している。障害者でも氷の海に浸かったり、モンゴルの砂漠を訪ねたりすることが不可能ではなく、障害者が大きな困難を乗り越えようとするのを援助する彼女の仕事に、現代におけるホスピタリティの1つのあり方が示されているように感じられる。

ホスピタリティといえば、キリスト教文化の中で育まれたように思われるが、わが国にもその伝統はあるのではないか。それは例えば「一期一会」を理念とする日本の茶道の伝統に求められるのではないかと、毎年茶道に造詣

の深い立教学院小宮山昭一理事長に講義をお願いしている。1999年度には、同理事長の尽力により京都から表千家の菅田健三宗匠をお招きして講義をお願いした。いつか、武蔵野新座キャンパスに茶室を建てることできないかと夢を描いている。

上げ膳据え膳のサービスは必ずしもホスピタリティと一致するわけではないとしても、旅人を接遇するホテルや旅館などの宿泊業はホスピタリティの提供が本務であるといえる。そこで、毎年旅館の女将や経営者を招いて講義をお願いしている。そうした中で、東京の下町、台東区谷中で廉価な日本旅館（「澤の屋旅館」）を経営する澤功社長の講義は、毎年多くの学生の関心を引き付けている。同旅館は畳と布団の和室に1泊5000円以下で泊まれる旅館であるが、全国の旅館に呼びかけて「ジャパニーズ・イン・グループ」というチェーンを組織化し、インターネットによって世界から旅行者を受け入れている。お客は世界各国から集まるようで、多文化交流に伴う異文化理解の実践が学生の関心の的となる。毎年何人かの学生が授業の後、同旅館を実際に訪ねている。

後半ではホスピタリティを発揮するための方法を示唆するような講義を配置している。社会心理学が専門の佐藤悦子本学元教授による講義は、ホスピタリティを「他者の世界を理解し、それを癒す相互行為」と定義した上で、対人コミュニケーション理論を援用す

ることによって、ホスピタリティの実践のメカニズムを理論的に解明するヒントを与えるものとなっている。上記の定義の各要素、まず「他者の世界」とは、「理解する」とはといった具合に講義は進むが、学生は他者理解のための認識の枠組みを学べるよう準備されている。

講義の最後は、前総長である塚田理名誉教授・立教学院院長、関正勝コミュニティ福祉学部長と私の3人でシンポジウムを行ってこの講義を締めくくりにしている。塚田名誉教授は、近・現代イギリス神学が専門であり、また観光客に行き届いたホスピタリティが提供される国として評価の高いスイスに自宅を構えておられるため、キリスト教におけるホスピタリティの概念、スイスの観光事業に反映されたその理念といった点について毎年興味深い講義をしてくださった。

今後の課題

「ホスピタリティの原点を求めて」を展開するにあたっての今後の課題としては、本格的な総合Bに脱皮させることである。現在の「ホスピタリティの原点をめざして」は、「地域への視座」も同じであるが、毎回あるいは2、3回ごとに異なる講師が講義を担当するリレー講義である。最終回は3人の担当者によるシンポジウムで締めくく

ることにしているが、それまでは学内や学外から講師を招いて講義を依頼し、コーディネーターが陪席してそれぞれの講義内容を全体の流れの中に位置付けるリレー式である。コーディネーターの他に複数の講師が講義を担うというところまで踏み込んでいるわけではないという点で、総合Bとしての条件を完全には満たしていない。

そこで、今後の方向性としては、同じように医療の現場からホスピタリティの実践について学ぶにしても、何らかの意味で対照的な複数の事例を取り上げ、接近法の違いを浮き彫りにすることによってホスピタリティに対する理解を掘り下げるといったことが考えられる。

そこまでまだ準備が整わないのは、それぞれの分野でどのように対照的な、あるいは対立的な接近法がありうるのかについて、コーディネーター自身まだ十分整理できていないためである。しかし、例えば、同じ宿泊業の分野でホテルと旅館ではホスピタリティにどのような違いがあるのかという点については若干の先行研究もあり、近い将来、それぞれの分野から論客を招いて議論を戦わせてみたいと考えている。

(おかもと のぶゆき 本学観光学部教授、1998～2001年度 総合B群「ホスピタリティの原点を求めて」コーディネーター)